

※八月二五日のお施餓鬼法要で行われた松原哲明師のお話しを文章にしてお届けしました。法話が始まる前に、私は次のような紹介をしました。

「法話の講師は、松原哲明師です。テレビ・新聞報道等でご承知のことと存じますが、松原哲明師のお師匠さまであり御父君である、松原泰道師が二週間ほど前、七月二九日に百二歳で遷化亡くなられました。松原泰道師は、昭和三五年より平成十三年まで、この日、この時、この場所ので四十年間にわたり御法話をいただきました。余計なこととお叱りをうけるかもしれませんが、泰道師のご逝去の三週間ほど前に哲明師のお母様もお亡くなりになっております。そうした、ご辛勞の中、約束を違えず本日お越しください。お礼の言葉もみつきりません」。※松岩寺では、五年前から法要はすべて椅子席です。この日も百五十席用意して座れない方もおられたから、二百人近くお集まりだったでしょう。そして、聴衆の顔ぶれが今年、ちよつと違いました。

例年、お施餓鬼の法話には来られない方の顔がありました。「なぜ?」「いつもより涼しいから」「暇だったから」。違うんですね。私が言わなくても、うちの檀家さんは泰道師が亡くなったことを、ちゃんと知っているんです。それで、哲明師が、どんなお話をするだろうか……。哲明師の二度とないこの夏を聴きにきていたのです。法話が始めると、緊迫した静けさが本堂を包んでいました。※この小誌を読んで、もつと知りたの方は泰道師と哲明師の著作を読んでください。法話の録音が聴きたい方はお申し出ください。データを送ります。でもね、あの時の雰囲気は送れないんです。いつもとは違う、再現できない今年だけの空気でした。※さて、住職が「来なさい」と言うから、新盆で八月十五日の法要へ期待もせず来る。そして、見えない何かをお土産にして帰る。次の年、法話を聴くために新しい顔が座っている。そんな顔を見た時、お釈迦さまに少しは恩返し（十一頁参照）ができたかなあと思う私です。

しよがづがんでだより

平成二十一年秋彼岸

松岩寺報 発行・編集 花岡博芳

秋のお彼岸のご案内をお届けしました。

しかし、いつもと封筒のサイズがちがうし何だろう。と、思っている方の反応は、おおよそ次のようになるでしょうか。

